

## 教育講演 1

## 雑感・今どきの若者像

松下 弘子\*

[キーワード] 発達過程、発達課題、アイデンティティ、動機づけ

## I. 資格社会

平成生まれ・平成育ちである「今どき」の学生たちにはどのような特色があるのだろうか。昭和生まれの親を持ち、偏差値に振り回されての高校・大学への進学、高校全入時代や大学全入時代といわれる現代社会の中で、どのように生きていこうとしているのだろうか。

私が非常勤講師として勤務している熊本保健科学大学(以下、本学)は知識・技術・創造・思慮を基本理念としている。ここで、心理学・臨床心理学・カウンセリング技法など心理学関連の授業を受け持って 20 数年が過ぎた。その間、臨床検査技師の養成のみならず看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士等の養成大学へと発展してきた。国家資格取得に向けて学生たちは本学に入学し、医療に係る専門職者への道を歩んでいく。なぜ医療系の大学に進学したのか、誰の勧めにより医療の道に入ろうとしているのか、動機は千差万別であり、時代と共に大きく変化している様相が 1 年次に実施している職業志向性チェックにも表れている。

過去 20 年から 10 年前と最近 10 年間を比較してみると、1 位だった「人間関係重視」は「労働条

件」重視に置き換わった。かろうじて「職務挑戦」は 2 位を維持できているが、このような意識が強くなったことを踏まえ大学教育の在り様も変化していく必要があると思われる。

生活レベルを落とすたくない、苦勞したくない、経済的に安定した生活を送りたい、奨学金返済に苦勞しない程度の給料が欲しいという学生らの意識に対して、大学教員側は「社会に役立つ医療人」に向けて、学生たちにどのような発信をしていけばよいのだろうか。

## II. 青年期の発達課題

ヒトの成長発達を心理学・臨床心理学の視点から見てみると様々な発達理論に基づいた名前が付けられている。生涯発達理論の中でエリクソン(Erikson, E.H.)はわが国での小学生時代を学童期、それ以降中学生から大学生の時期を青年期とし、心理・社会的な要因を重視している。そして発達にはプラス面とマイナス面があり、青年期は「アイデンティティ確立」対「アイデンティティ拡散」というバランス関係からの危機があったとした。

発達には大きく身体的発達と精神的発達があり、前者では定頸も初潮も時代と共に早まっていることが観察され、身体加速現象が随所にもみ

\* カウンセリングオフィス KMJ メンタルアシスト・熊本保健科学大学 kmjhm@minos.ocn.ne.jp

られる。しかし、後者は後傾している。受験や偏差値を絶えず意識させられ、点数評価される思春期で学童期で培われた自己効力感や自尊感情が薄れ始め、いつも評価を気にするようになる。青年期は身体的変化が著しくボディイメージは変わり、自身に対する認知的変化もみられる。そのような大きな変化を体験しているときに自我に対する問いかけ、つまり「自分は何者か?」「自分が将来進んでいく方向はどっちか?」といったアイデンティティに係わる問いかけが始まるといわれる。

一方、マーシャ (Marcia, J.E) は心理社会的危機を経験しながら自分の生き方、職業選択に積極的に関与するまでを4つのアイデンティティ・ステータスを提唱している。第1に「アイデンティティ達成」。これは、危機をすでに経験し、自分が選択した生き方、職業・価値観に積極的に関与している人で、自分の意志で選択しており、自分の選択に自ら責任を持っている。第2に「モラトリアム」。これは、今現在、危機を経験しつつあり、積極的関与をする対象を模索している人であり、いくつかの選択肢について迷っており、人生についてのいろいろな可能性を前にして、アイデンティティの決定を先延ばししている。第3に「フォアクロージャー」。これは危機を経験していない人である。自分の生き方や職業、価値観について積極的に関与せず、親や年長者の意見や価値観を疑問に思わず、無批判的に自分のものとして受け入れる。最後に第4は「アイデンティティ拡散」。これは危機を経験するしないにかかわらず、積極的に自分に関与できない人の状態をいう。自分の人生に責任を持った主体的選択ができず、危機を前にして、自分が何に興味があり何をしたいか、自分は何者かである経験をしていないため、何者かである自分を想像できない。危機を経験した後もやる気さえあれば何でもできると安易に考えている。

青年期は大人になる前段階で重要な時期である。アイデンティティ・ステータスは固定的なものではなくアイデンティティ拡散からモラトリアムを経て達成へ移行することもみられ、流動的で

あると考えられていることから、心理社会的な側面をも育てる意識と働きかけがさらに求められる。

### III. 進路決定と家族変化

「勤勉さ」対「罪悪感」の危機を体験した児童期を経て、中学生～高校生の時期、いわゆる日本でいう思春期(青年期)にある子どもたちは、偏差値や受験勉強に嫌でも晒される。地方の都市部では夜になると学習塾周辺で渋滞が起こる。子どもたちをお迎えに来た親の車の列で1車線が占有されてしまうほどである。子どもたちは1点でも偏差値をアップさせ、志望する高校を目指す。高校全入時代とはいえ、行きたい高校に行きたい、だから親も勉強したいという子どもを支援するのは当然であり、受験に関与する力も強くなるわけである。高校受験は親子の共同作業となり、家族全体が受験体制となっていく。

ある親御さんと私の知人との会話「ウチん子は、頭はヨカとバツェン、会社員は務まらんと思うとタイ。ヒトに使わるとは無理だけん、弁護士にさせようと思うとバツェン、どぎゃん思う? (熊本弁訳: 私の子どもは会社員として仕事をするのは難しそうなので、弁護士はどうかと思うのだが、あなたはどう思いますか?)」「頭が良くて成績が良かなら、弁護士はよかろうね~ (熊本弁訳: 頭が良くて成績も優秀であるならば、弁護士は向いているのではないですか?)」これを笑い話として聞き流せるだろうか。もう一つ、高校の三者面談での一コマ、担任教諭から「お母さん、大学のオープンキャンパスには行かれますか?」お母さんご自身が大学のオープンキャンパスに行くかを尋ねている。親御さん側は子どもの自立、将来性、経済力を念頭に国家資格取得を勧める。『お母さん進路指導室』の影響は大きい。

3世代同居時代は昭和の時代で終わり、核家族が当たり前となった。母親もフルタイムで働き、住宅ローン支払いや教育資金捻出の一助を担っていることから経済力がある母親の影響力が次第に大きくなってきたように思う。

私たちは発達過程において様々なシステムの影響を受けている。システムの最小単位は家族で、

親は地域や文化、社会、時代の動きなどから強く影響を受けつつ、しつけや家庭教育の中で子どもに価値観を伝えていく。親は自身の人生観、生活レベルをベースに、子どもに対し「将来生活に困らないように」と技術を身につけさせようと考えている。その背景には、終身雇用の崩壊や給与上昇が見込めない、パワハラ・長時間労働など労働環境の悪化から転職したものの給料が減るといった経済的問題もある。「わが子には苦勞させたくない」という親の思いがあって、「自分の将来のことを考えてくれている親の考え」を素直に受け入れていく学生も多いと思われる。そういった点から進路指導室は高校よりも家庭にあると言っているかもしれない。

「国家資格さえあれば」食うに困らないと思っているのは親だけではなく、自分の時間を大事にしたいといった学生たちの価値観も相まって、親の影響や将来不安が進路決定に大きく影響していることが窺われる。

臨床検査技師の仕事がどんなものかをよく知らないで入学してくる学生もいて愕然とすることがあるが、高校の進路指導や家庭での情報収集が不足しているのは事実で、入学後から「医療人への道」に向けての動機づけを図る取り組みが求められる。

#### IV. 大学教育における人材育成

大学教育で医療に係わる人材育成の在り方を考えるとき、経済的安定を得るだけではなく人の役に立つことができる大切な仕事であることを如何に伝えていくか、難しさを痛感する。援助コミュニケーションの授業では、動機づけ理論や学習理論、発達理論を切り口に青年期心性やメタ認知能力の強化による自己理解を促す。さらに医療課題

を踏まえた臨床現場の話をしていくと学生たちは敏感に反応し始める。「臨床検査技師の仕事ってカッコいい」と。

では、臨床検査技師になるための専門性とコミュニケーション力・洞察力・問題解決力・課題探求力・自己責任を育てる教育を目指している本学の理念を4年間の学生生活に落とし込んでいくためにどのような経験を積んでもらうとよいのだろうか。

2016年(平成28年)4月、熊本地震が起きた。熊本は震度7の地震を相次いで2回(4月14日と16日)経験した。日本では初めてのことだった。学内の被害も甚大で、授業再開まで3週間を要した。学生らは自身も被災しながら避難所に向かい被災者のケアに当たり、他県から来たボランティア学生らの受け入れ準備に奔走していた。他県から入学してきた学生は地元県に戻って募金活動をした者も少なくない。半年後の学園祭前夜祭で熊本地震報告会があり、壇上に上がった学生らが報告する姿を見る機会を得た。堂々と、しかも淡々と自分たちの経験を語る表情を見るに、「関与することの大切さが分かった」と伝えてくれたように感じた。入学早々で授業開始直後だった1年生にとっては上級生の活躍ぶりに感動し、報告会で泣いている者もいた。学生らは何事かあれば、自分にできることを考え実行する力を発揮し、人の役に立つ自分を経験した。そして我々教員側は、いつもの彼らとは違う大人の顔を知った。

他者から言われたいとしない、消極的などとレッテルを貼ってしまわれがちな学生らの積極性を引き出すために教員側の「彼らは力を持っている」と信じる視点がなお一層求められると、思いを新たにした熊本地震だった。